

## 総合心療センター 精神科

センター長 戎正司

---

### 【診療体制】

2020年は、未曾有のパンデミックが世界を席卷した、歴史に残る1年となりました。このウイルスは私たち精神科の臨床において最も大切な、人と人が交流し繋がることへ甚大な打撃を与えたと言えるでしょう。そもそもこのパンデミックが始まる以前から、現代社会では人々の関係性が希薄化して孤立化が進んでいるといわれていましたが、このパンデミックでそれがさらに加速するのではないかと思います。我々総合心療センターも、人と繋がること、より深い関わりをもつことをモットーに臨床をしていますが、それがこのパンデミックで十分に機能できなかったのではないかと反省しています。

そんな2020年の総合心療センターは、前年に副センター長の宮崎洋一先生が退職され大きな戦力ダウンに苦慮する中、3月に瀬戸口隆彦先生も退職されました。4月からは総合診療科から町野文規先生が精神科に移られ、戎が入職し、明神和弘先生からセンター長の役職を交代することになりました。私としては、長年にわたり総合心療センター長として重責を果たされた先生の後任が務まるのか不安でしたが、先生をはじめ、スタッフの皆さんに支えていただきました。そんな中、色々ご指導して頂き頼りにしていた明神先生が、ご都合で7月からしばらく休まれることになり大変な状況となりました。その間、スタッフの皆さんが一丸となって頑張ってくれて何とか乗り越えることができました。

パンデミックは、当センターの診療体制や病棟運営にも大きな影響を与えました。最も苦慮したのは、感染拡大予防のために、ベッドコントロールや、入院患者さんに行動制限をお願いすることになり、それで入院患者数がしばらく低下したことでした。精神科の入院患者さんは身体的な活動性に問題ない人が多く、感染拡大予防のための色々な行動制限をお願いすることは、患者さんとスタッフの間に葛藤をもたらしました。それについては、患者さんとのコミュニケーションを大切にしながら、診療会議などで意見を出し合い議論を繰り返しました。急性期病棟のみの診療体制は、多くの外来患者さんが、必要時にスムーズに入院して短期間で退院し外来でフォローする、という一連の流れで成り立っているため、それが滞り多くの患者さんにご迷惑をかけることになりました。

冒頭で述べたように、このパンデミックが収束しても以前の状況に戻ることはなく、関係性の希薄化や孤立化などのメンタルヘルス問題は、より一層深刻になると予測され、その変化に対応できるように、スタッフ間でコミュニケーションをとり、多様性を維持しながら、田村雅一先生から始まり現在に至っている精神科チーム医療の発展に取り組んでいきたいと思っております。